

森田草平『煤煙』と『自叙伝』

根 岸 正 純

1 煤煙事件と『煤煙』

森田草平と平塚雷鳥（本名・明子）との出会いは、明治40年6月に開設された閩秀文学会においてであった。そして翌41年3月彼らが情死行を企てるにいたったのが、いわゆる煤煙事件である。『煤煙』によると、草平は次第に雷鳥の「冥府の烙印」（新聞初掲本文では「ケイン——*カインの誤か——の標」）を印したような風貌に引かれていったが、40年中は、年の瀬も押しつまって入院中の草平を見舞った雷鳥にダンヌチオの『死の勝利』を貸した程度であった。

翌明治41年になると急速に親密の度を加え、1月末日雷鳥の小説草稿「愛の末日」に批評を与えたりことが、急速な進展の転機になった。「愛の末日」は「自意識の強い女が意気地の無い男を振棄てて信州へ隠れに行く」という筋であったが、草平は長い批評の末尾に、「伝説に依ればサッフオーは顔色のダークな女であった」と書き添えた。雷鳥は色の浅黒い方だったらしく、「ダークな女」で彼女を暗示したのである。またサッフオーは、6年前に読んで以来深く魅せられたドーデーの「サッフオー」の印象につながっていた。従ってこの1行は、雷鳥への愛の思わせぶりの告白であった。この後、2人の間に演じられた感情のやりとりや行動を辿ろうとすれば、そのまま『煤煙』を論ずることにならざるを得ない。というのは、『煤煙』が事実の忠実な叙述であるというよりも、既に指摘されているような、小説『煤煙』のカオスを通してでなければ、事件を探ることが不可能であり、また広義の煤煙事件は、『煤煙』の続篇ともいべき『自叙伝』の完結を以て完全に終局を迎えるといえるからである。そこでここでは、情死行に一足飛びに筆を進めることとする。

草平と雷鳥とは、終始ちぐはぐな要求に駆られながら、共に死を求める一点で目標を一にし、同じ年の3月23日塩原に近い尾花峠で心中をはかったが果たさず、山上で捜索の警察官らに保護されるという事態をひき起した。妻子をもつ「文学士」と、会計検査官を父とし女子大出の知識女性とが演じたこの心中未遂事件は、ただちに新聞紙上にセンセーショナルに報ぜられ世人の関心をよんだ。『東京朝日』は、

古来情死の沙汰珍らしからずと雖も、本件の如き最高等の教育を受けた紳士淑女にして、彼の愚夫愚婦の痴に倣へるは、実に未曾有の事に属す。自然主義、性慾満足主義の最高潮を代表するの珍聞と云ひつ可し、而かも兩人が尾花峠の山上に於て取押への警官に対して、『我輩の行動は、恋の神聖を発揮する者にして俯仰天地に愧づる所なし』と揚言せるに至つては沙汰の限ならずや。（明治41. 3. 25）

と書いている。

草平の行動を弁護する者もなかったわけではない。翌日の新聞で馬場孤蝶は、「森田君は常に不安の念を抱きたり。曾て小説の概説を語りて、生れてより不安あり。故に芸術や事業によりて之を慰むるも、予は到底それに満足する能はず。故に人生を芸術にする人間を書く積なりと云へり」という理解を示し、²⁾ 生田長江は閩秀文学会の公開講演会（3月28日頃？）で急に演題を変更して、「友人のために弁ず」と題して熱弁を揮った³⁾ 長江の弁舌は後述する彼の草平論から推して孤蝶の弁疏とほぼ論旨を同じくするものだったと推測される。しかし彼らは年来

の師友であり、文学会の講師の中で、草平と共に最後まで残った3人の中にいた。その上草平の当の相手がその文学会の聴講生だったから、弁明に一役買って出ねばならぬ立場にあった。

この事件に対する識者の反応はさまざまであった。清水茂氏は、煤煙事件をめぐる二葉亭・漱石・鷗外が示した知識人のエゴに関する問題意識を概観した論考⁴⁾の中で、長江・与謝野晶子・孤蝶などの「浪漫主義文学者がとかく共感と羨望の目をもって、手放しでこの事件をむかえ」、「花袋はじめ自然主義作家の多くにとっても、表面の態度はどうであろうと、内面の事情はほぼ同様であったろう」とのべている。

一方、同氏によると、『女学世界』第8巻第6号(明治41年5月)の「思潮」欄に、三輪田元道・三宅雪嶺・内田魯庵・二葉亭が、「両人の行為に対する論評」をよせている。まず「良識的な教育家の代表と目されていた」三輪田元道(「三人の葬らるゝのみにはあらず」)は、両人の行動を「従来^{もと}の偏屈な道学に対する反動」である「文芸の毒」としてとらえたのち、結局「自然主義の実行者に向って反省を求めても無効^{むた}であり」、「社会的制裁の一部を、当事者に加へねばならぬ」といい、三宅雪嶺(「一種の色情狂か」)は「たんなる異常心理の視覚^{みだ}だけから事件を割り切ろうとした」。また内田魯庵(「悲劇?喜劇?」)は、「『煤煙』事件を時代の暗流にさおさす『精神的に純潔』な新事実^{むだ}だとして俗見の非を衝きながらも、一方、芸術と実人生の混同という二元論^{むだ}的な観点から、けっきょくは実人生を『軽忽にも芸術的に弄ぼうとして忽ち失敗に帰した』『好箇の滑稽劇』であると批評した。

同じく『女学世界』の「論評」における、二葉亭の「暗中模索の片影」では、「魯庵とはむしろ逆に、ダヌンツィオの『死の勝利』を地で行ったというその「暗中模索」のできごとが一つの思想の実行として不徹底な結末をみたことに『滑稽』をみて」おり、また「両人の行動をうごかした『意識以下の心理事情』を、個人主義にもとめ、その「社会主義との衝突矛盾」に言及する広い視野を示している。

以上は、『煤煙』発表以前の諸家の批評であるが、一般世人が草平を白眼視し、「社会的に葬られる」立場に追い込まれたことは、くり返すまでもない。草平は、塩原温泉まで出迎えた生田長江らに伴われて、東京への道に戻って来た。そして長江のすすめもあって漱石の庇護を求め、漱石は、門下生の彼を温く迎え入れた。彼は漱石宅の一室に悄然と閉じこもり、鏡子夫人がひそかに酒を運んだりした⁵⁾。

草平の行動に対する漱石の批評は手きびしいものであった。『漱石先生と私』によると、漱石は「二人の遣っていたことは、どうも恋愛ではない。結局、遊びだ、遊びとしか思われぬよ」といい、遊びだときめつけられることの心外だった草平が、「恋愛以上のものを求め」、「人格と人格との接触によって、霊と霊との結合を期待した」という意味のことをいうと、男女が「霊と霊との結合を求めるのに、恋愛を措いて外に道があるものか」と一笑に附した。漱石はまた、女も「矢張り遊んでいたんだよ。(中略)云うこと為すこと悉く思わせ振りだ。それが女だよ。女性の中の最も女性的なものだね」といい、

まあ、それが遊びであったにせよ、なかったにせよ、結局、君等が死んで帰りさえすれば、何も問題はなかったのだ。事実がそれを証明してくれるから(*このことばは表現をかえて同書に重出している)ともいった。また相手の女性がみずから「中性」「二重性格」と称したという草平の説明をも、漱石は取り合わなかったが、「自ら識らざる偽善者^{アン・ロシヤス・セボクリツ}」つまり「自ら識らざる間に別の人になって行動する」女だとすれば解釈出来ないこともないとし、「何うだ、君が書かなければ、僕がそう云う女を書いて見せようか」と冗談のようにいったのが、『三四郎』の美禰子の造型につながるのは周知のとおりである。

『自叙伝』に「主人^{あな}」として描かれている漱石は、草平らの行動が「インテレクチュアル・

ファイト」であり「遺書^{かきおき}を見ても少しもパーソナルな所がない」としながらも、「僕は君等の遣った様な事は遣らんが、あれをアンダスタンドすることは出来る人間だよ」といい、草平にとって「小説でも書く外に生きる道はなかるう」という考えから逃避行の体験を作品化することをすすめた。草平の回想では漱石の言に一々恐縮したていになっているが、「恋愛以上のもの」の愛とたたかひのあとを訴えることには草平にも深く期するところがあったことは、『煤煙』自体が物語っている。

草平は漱石の家に2週間ほど世話になって後、4月10日牛込筑土八幡前町24の植木屋方に移り、更に7月末、横寺町正定院本堂横手の六畳間に転じ、『煤煙』が終り(42年5月)に近づいた頃、丸山福山町の伊藤ハルのもとに戻った。従って『煤煙』は上記植木屋方と正定院で構想・執筆され、明治42年1月1日から5月16日まで、『三四郎』完結のあとをうけて東京朝日新聞に連載された。草平の文名は一挙に上がり、首尾よく社会復帰をとげた。

*

現在流布している『煤煙』の本文は、明治42年11月以降単行されたものによっているが、新聞初出のそれと多少のちがひがある。その改筆は、作品の全貌や性格を変えるほどではないにしても、部分的には重要な修正もあり、章立ては全面的に改めている。そこで初出本文を中心に扱うことも考えられるが、単行本における改稿は同時に決定稿と見ることもでき、章立ては単行本に従った方が大方の叱正を仰ぐにも便宜と考え、単行本文を用いることとした。『自叙伝』についても同様である。

『煤煙』は小島要吉(草平)の帰郷の場面からはじまる。そして全34章のうち、冒頭の6章が岐阜の郷里を舞台としている。要吉にとって、郷土は暗い陰影につつまれていた。父は要吉が3才のとき「人の思む脱疽といふ病」でみじめな最期を遂げた。母・お絹は名古屋生まれの画工との関係をつづけ、おどおどしてわが子を憚る様子がある。要吉自身「或は此身を持崩した老画工の血を別けた子かも知れない」とひそかに疑ってもいた。家系にまといつく呪いの淵源は祖父の代にまでさかのぼる。祖父は齋藤道三の首塚のほとりの松の老樹を伐り倒したたたりで、40日余り悩み苦しんだ末に31才で息を引取ったのである。

要吉の妻・隅江(つね)は幼児(亮一)と共に同じ村内の実家に身をよせている。しかし郷里での再会は、要吉の心を浮き立たせはしなかった。隅江との間には越えがたいギャップが横たわり、「嘗て要吉が放縦な空想をめぐり対象に成った女だとは、如何しても思はれない」のであった。(要吉には東京の下宿で関係をもつにいたったお種(岩田さく)もあった。)彼にとっては、近所の番太の娘であり、女郎上りながら「名工の手に成った銅像^{ブロンズ}」のような肉体の持主である、34才のお倉(お重)の方に心を引かれた。それはともかく、墓地で縊死した事件を配するなど、郷土をひたすら暗鬱な世界に仕立てるために、作者がいささか筆を用いすぎている面がないでもない。

『煤煙』の序幕ともいふべき、この郷土の場面は好評を呼んだ。連載2日目の1月2日、漱石は早々と孤蝶にあてて「煤煙出来栄ヨキ様にて重畳に候」と書き送った。2月7日の草平あて書簡の冒頭に「煤煙世間にて概して評判よき由結構に候。先日四方太は激賞の手紙をよこし候。」とあるのも、大半は郷里の部分についてである。『煤煙』完結後の小宮豊隆の批評⁶⁾でも、「『煤煙』故郷の巻数章は、此意味(*要吉の一種独特の色彩を持つている気持)に於て、最も優秀なる名篇だと思った。底を流れて陰鬱な悲惨なものである」といい、清水茂氏(前引論文)は、「それら(*要吉の家にまつわる出来事や彼の心情・人生観)の積みかさねがかもし出す暗鬱な雰囲気は、思い入れや身ぶりの過剰はあるにしても、三四郎の郷里の牧歌的な自足性にくらべると、たしかにすぐれて農村的である」と評価している。

つづいて要吉の上京と共に舞台は東京に移るが、真鍋朋子(雷鳥)の出現に先立ってお種と

その母・「嬢様」(伊藤ハル)の登場する丸山福山町の止宿先の場面があり、お種との出会いのいきさつが語られる(7・8章)。この箇所が掲載されはじめると、俄かに悪評を浴びることになった。漱石が

草平今日の煤煙の最後の一句にあたら好小説を打壞し了せりあれは馬鹿なり。何の芸術家かこれあらん(1・26, 小宮豊隆宛書簡)

田舎から東京へ帰って急に御種の手を握るのは不都合也。あれぢや、あとの明子(*朋子)との関係が引き立つまい。要吉は色魔の様でいかん。(2・7, 草平宛書簡=一部前出)

と評したのは、お種との交情のはじめを回想して、「要吉は我にもなく其手を握った」(8—新聞6の2)と書いた1文に対してであった。後者の書簡で「一から六迄はうまい」といい、「七」になって神戸(生田長江)が登場してのちの場面については批判している。総じて東京に舞台が移ってからの部分は悪評しきりであり、漱石は単行『煤煙』第1巻(明42・11)に寄せた序文でも同趣旨をくり返している。草平の小宮豊隆宛書簡(42・1・29)にも、

六は誰にも評判が悪い。長江は止めた方が可かったといふ、阿部次郎も東京へ帰ってから駄目だねと云ってるさうだ、切めてわが小宮氏はと考へて待てましたら矢張駄目だ、ひとり之をほめた者は荒川玄耳氏あるのみ、愈々以て駄目な証拠だらう。

とある。それがあらぬか、お種のいる下宿先の場面とそれに織り込まれる回想のくぐりや、単行本で全面的に書きかえている。草平書簡にいう新聞所掲の6章は単行の7～9章に改筆分散させた。漱石が非難した部分は「要吉は我にもなく其手を執った」と改め、「女は男の弄ぶが儘に手を借して居た」とつけ加えた。

さて、つづく10章から真鍋朋子が登場し、いわゆる煤煙事件の恋愛へと進むのであるが、冒頭の郷里の暗い世界、そこに住む隅江と東京のお種2女性との関係に、まず筆を染めたことは、説得力の有る無しは別として、作者の意図をおのずから物語るものである。第一に郷土の世界をみだしている暗い家系意識から、第二には2人の女性から脱出するために、朋子との愛の模索に必然的に行きつくほかないという、自己を正当化する論理を具象の世界に投影しようとしたのである。草平は「落果」⁹⁾というエッセイにしている。

『煤煙』の主人公、女主人公共に特殊の運命を担って生れた人物である。私は人間の行為を支配するもの、即ち作物の動機と成るものとしては、思想よりも性格よりも運命が最も重大だと信じている。自分の境遇上からも左様考へるのでせう。

草平が、自己の暗い運命に悩み、「深刻がる」機縁となったのは間ちがないが、「自分だけがそうした宿命を背負わされているということに、一種の悪魔的な矜りさえ、抱くようになって」⁸⁾もいたから、かえって楽天的になり得る一面もあった⁹⁾。また草平の天性はむしろ、人のいいオプティミストであり、悲観の見通しをもつことができない点にあったという¹⁰⁾。その上、彼の宿命は、悪質遺伝と不義の子とのいずれかの疑惑を免れ得ないところにあったから、どちらにせよ、彼の日常の起居を抑圧するようなものではなく、かえって「家」からの精神的被害者としての、いわば特権として、「家」の外へ自由に飛び立つことを許されたようなものであった。奇妙ないい方が許されるならば、自由な行動を余儀なくされていることに悩んでいたのである。だがそのために、暗い家系意識からの脱却の場所として、いかなる行動をも必然的に導き出す契機はなかった。具体的にいうと、それが恋愛でなければならぬ理由を、まして煤煙事件で実演したような恋愛でなければならぬ理由を、彼の暗い郷土の世界に求めることは出来ないのである。と同時に、故郷を振りかえって実感する暗い世界の造型と、未来に向って自由に選択できる新しい行動の叙述とが、質的に分離せざるを得ないのである。小宮豊隆が、

『煤煙』の故郷の巻は、其れ自身としては、得易からざる名文である。しかし乍ら惜しいことには、後段との連絡が取れない為めに離れ離れになって、全体の調和を破ぶっている。¹¹⁾

と指摘しているが、前述の観点からすると、前・後段の「連絡のなさ」は必然の帰趨であった。

それにくらべると、つね（隅江）・さく（お種）の2人の女性からの脱却の希求は、もう少し必然的に雷鳥（朋子）との愛の探索に結びつき、それらの愛の葛藤が作品の中で活写され得るはずであった。草平は雷鳥との関係において求めたものが「恋愛以上のもの」「霊と霊との結合」であることを力説し、その理由を、

もしこれが単なる恋愛であれば、二重恋愛の苦痛から免れるために、もう一つ恋愛を重ねるだけである。二人の女性から放たれるために、もう一人の女性を犠牲にする——そんな事をしては、ただ相手に済まないと言うばかりでなく、自分自身も永劫その渦中から免れるわけに行かない。¹²⁾

と書いている。ところがこの言葉には半ば真実を含み、半ばは自ら意識しない嘘偽をおかしている。といて言いすぎならば、自ら仕掛けた罠に足をすくわれているのである。

というのは他でもない、「二重恋愛の苦痛」に更に恋愛を重ね、その「渦中」に捲きこまれることなど、この時の草平にはなかったのだ。つまり、過去の二つの恋愛は既に終了していたのであり、新しい恋愛を「重ね」ても「苦痛」や「渦」は起こり得ない筈であった。しかし、過去の二つの恋愛の記憶に対して、新しい恋愛を求め、「恋愛以上」「霊の結合」を夢みていたことは事実なのである。過去の二つの恋愛の性格は、明治38年の短篇「棄てられたる女」にその一面が描かれている¹³⁾主人公の青年はヒロインのお種（さく）を、ただ「棄てられたる女」の故に恋し、初恋の少女（つね）には単に「田舎の少女」なるが故に恋した、というのである。この2つの恋には共通の性格がある。はかなげな境涯とそこから期待されるデボーションの姿態、そしてかなりセクシャルな情緒——それが過去に経験した恋であった。『煤煙』では、お種の方について、

一昨年の秋、お種は片附いた先方から離られて来た。唯子供がないからと云う言分であったそうなの。(7)と、彼女が「棄てられた女」だったという記憶が書かれている。しかしそれはまさしく記憶であって、新しい恋との葛藤がまき起こるはずがない。もはや小説の主題の中に織りこむべきみずみずしさを失っていた。従ってその過去の恋愛に対して、「霊の結合」という新しい性質の恋愛を経験するためには、異常な決意と行動が必要だったのである。

こうした決意を彼に強いた一要因として、漱石師事による環境の変化が考えられる。といっても、漱石膝下に集うた知的エリートたちの手前、ハイカラな恋を誇示しようという街気のなせるわざではあるまい。またそれ以前に、出京した田舎者のコンプレックスからの背伸びと考えても的外れとなろう。明治38年に繙いたドーデーの『サッフオ』が彼を魅了したのは、「あの小説の筋が、田舎から東京へ出て来てゐる学生には、いかにも有り相な、身に応へる筋に出来てゐる。(中略)おどおどしながら生活してゐる間に、非常に魅惑的な抵抗することの出来ないような力に捉へられて我にもなくずんずんその方へ引きづられて行く、(中略)と、まあさういふ点が身につまされ¹⁴⁾ たからであったが、そうした魅惑の主をさくに見出したと考えられる¹⁵⁾点からいって、田舎出の身の上は、むしろ抒情化されていた。

こうして、彼を新しい恋に向かわせる素地になったのは、街気やコンプレックスよりも、漱石門下の新しい環境で刺戟された探求の意欲とでもいうべきものであろう。雷鳥の、「冥府の烙印」を額にとどめた風貌に魅せられるなどということは、数年前の彼の姿勢からは想像し難いように思われる。そしてその雷鳥を相手とする恋の実行と新たな自己の実現を「決意」したのである。

もっとも草平が、雷鳥の小説への批評に、彼女をもサッフオに擬する思わせぶりの一文を付したことは、前にのべた。そこには過去の愛情の流儀を完全には払拭できなかった一面を見出

すことができる。だがそれよりも小説の記述がほぼ事実を模しているとするれば、神戸（長江）の示唆や朋子（雷鳥）の発意が先行するとはいえ、ダヌンチオ『死の勝利』を彼女に貸し与えたこと、更にはその前に入院中の要吉（草平）が枕頭にあらかじめ『死の勝利』をおいていたことの意味は大きい。『煤煙』がこの書やドストエフスキー『罪と罰』に影響されたことは知られる通りであるが、正確には、同時に煤煙事件そのものを誘導したのである。『罪と罰』のもつ「劇烈」さと、『死の勝利』における、その極致としての「死」——少なくともその観念——を自己に課そうとした。後者の主人公の青年・デオルデオは甘美な恋愛の挙句、イッポリタを死の道連れにするのだが、それは彼が「彼女に対する自分の影響が、単に肉感的なものゝ上のみ、心意の皮相にのみ限られていたこと」（生田長江訳）を確かめ、その限界を打ち破って愛を永遠のものにするには、「暴力に対する必要」を痛感したからであった。草平は、事件後に漱石が下した「恋愛ではない、遊びだ」という批評をまつまでもなく、「恋愛以上のもの」「霊と霊との結合」を求める自己の欲求が「遊び」に墮するのを防止する必要を予感していた。それには、新しい愛には、死をも辞さない両性の合一と真剣さがなければならず、愛の法悦への希求を、たえず死の観念で威嚇しつづける必要があった。伊藤整が、情死行直前の部分を説明した次の表現は、ここにもほぼ転用できる。

性よりも強烈な目標を設定しなければ、二人の関係の緊張感は崩壊し、仮装は剥落して、無関心と街ひが露出しさうであった。¹⁶⁾

こうしてとりわけ『死の勝利』が、彼の決意や行動を牽引する役割をもったのである。

*

『煤煙』の記述を辿ってみると、要吉と朋子との恋愛は、2月にはいって急速度の進行を見せる。というより、互いに待ち設けていたかのように一挙にかなりの深みにおいてぶつかり合う。ことにその月の朔日とおぼしい日から連続6日間のデートと手紙のやりとりでほぼこの恋の全貌が露わになったといつてよい。その第1日の朝9時、前日の約束によって、はじめて水道橋駅頭に相会した。2人は新井薬師で愛の告白めいたことばを交わし、柏木駅から九段へと寄り道を重ねた末、上野公園の両大師の広場で、朋子の例の

「如何かして、もっと如何かして。」

要吉は鼻と抱き緊めた。

「足りない、足りない。それぢや足りない。」⁽⁷⁾

という訴えがある。ところがいつまでも泣きやまぬ朋子を前にして、

要吉は氣抜けして茫然眺めて居たが、思はず少し立退いた。俄に二人の間に鴻溝が穿たれた様な心持がした。

伊藤整にいわせれば、

「どうかして、もっとどうかして」と言って朋子は激しく泣き、中々泣きやまなかった。それははじめ肉体の接触を求める声のやうであつた。しかし、それはやがて何か違ふ感じのものになった。自分の生存の条件の中に閉ぢこめられてゐる魂が解放を求めて得られないことを訴へる絶望の声のやうに聞えた。

『煤煙』一巻を蔽うている、要吉の恋情の希求と失望とのくり返しの最初の一こまが、早くも始まったのである。これに似た2人のやりとりを、次の2日間にも辿って見よう。

翌2日の再会は朋子の破約で果たされず、しかし要吉が帰宅すると長文の手紙が届けられていた。その中には、人並の恋心を思わせる文脈を混えながら、同時に

ダブル、キャラクターに悩まされて居る身は戯れにも左様な事は口外し難いのです。仮初に恋といふ字に唇を借すは、我理想とする恋の手前恥かし、自他を欺くものなれば。恋とは純一無雑なものでせう。

とあり、また次の周知の数行もあった。

私は中庸といふことは出来ないのですから、火かさらずば氷、^氷而して火は駄目だと確めたのです。氷です、雪です、雪国へ突進します。(18)

要吉はもともと「恋愛以上」の夢を求めていたはずである。その要求をみたしてくれるのは、はげしい恋情と、彼自身にも未知のプラスアルファであった。してみると、朋子のことばや手紙に見え隠れする世間並の恋情らしいものとともに、謎めいた言句のかずかずは、彼女が理想に近い恋の相手であることを思わせた。しかし、朋子が見せる「恋愛以上のもの」が恋愛の拒否に通ずるならば、要吉は耐えることができない。両大師での前日の朋子の号泣への反応もそうであったが、上記の手紙につづく、次の記述にも、同様の態度があらわれている。

固より要吉も終局のない恋を夢想しては居なかった。(中略)唯こんなに素早く女から先んじられやうとは思はなかった。(18)

ここには、朋子の手紙に恋の破棄の気配がちらつくと見たための、敗北感と屈辱感が露呈している。そして

要吉は復讐のためにも悦楽のためにも、何んな手段を尽してでも、今一たび逸した鳥を捕へなければ置かぬと誓った。(18)

更には「斯うなれば恋愛も単に知力上の争ひに過ぎない」とまでいっている。「恋愛以上」の恋愛を求める要吉にとって、このように血みどろの暗闘を余儀なくされることは心外なはずであるが、「恋愛」と「恋愛以上」とを同時に追い求める以上、この様な陥穽に自ら身を沈めるのが当然ともいえるのである。

その翌日、九段中坂で要吉は、「私達の何は——^{さう}左様だ、ま、恋だと云はせて下さい」といひ、招魂社付近の料理屋では、女の手をとって、

ね、私を憐れんで下さい。愛することが出来なけりゃ、^き切めて憐れんでも下さい。それも出来なけりゃ、^き切めて——^き切めて私を欺いてなりと下さい。(19)

と掻きくどいているのは、恋愛らしい演出だけで満足しようという譲歩した哀訴であった。ここまで自卑的な身振りを見せ、尚且朋子がそれに応じないにも拘らず、依然として要吉が執着するのは不自然ともみえる。しかし恋愛の拒否が一面で「恋愛以上」に通ずる奇妙な循環がある以上、やはり先にのべたと同じ意味で、自らえらんだ陥穽から躍り出ることにはできないのである。

しかし——というよりも、それ故に、翌4日以降、要吉の態度に微妙な変化が生じた様に見うけられる。これは、錯綜する夾雑物を都合よく切り落しての解釈にすぎぬけれども、前日まで、いわば「恋愛」を通して「恋愛以上」を求めた要吉が、「恋愛以上」の要求を主体にして、あわよくば「恋愛」への転換を期待するという風に移行したものの様である。「私は女ぢゃない」という例の告白が4日なのであるが、後に漱石がこの告白を一笑に付し、また要吉が女の詐術を見抜けなかった(清水氏前掲論文)そしりは免れないにせよ、彼が恋愛の不可能を信じこんだ「打撃」にもかかわらず、「二人は生まれながら同じ様な運命を背負って居たのですね」と、新たな共感をいただき、自分の身の上まで告白するところに、おぼろげな旋回点が見出されるのである。その後も「自分は矢張自分の想像に弄ばされて居たのでは有るまいか」という反省や疑惑はくりかえされるが、「恋愛」ではなくて「恋愛以上のもの」の成否が焦点になっていった傾向がある。

明るる5日、ニコライの礼拝堂で遠目に見た朋子の額に「カインの刻印」の認め——出会いの第一印象以来、要吉には朋子の「顔」がかなりの意味をもっていた——、「女の笑顔が消えて行くと共に、自分の^{いのち}生命の精を奪ひ去られるやうな気がした」りするものの、同じ日の朋子

への手紙には、

われは執拗に君を愛す。日夜に君を思ひ、君を慕う。いかに想はむも其甲斐なきを知ればなり。君より愛せらるゝ日の永劫来らざるべきを知ればなり。これをもし恋なりとすれば、世に斯かる望み絶えたる恋を為せしものありや。(2)

と書きつけたのもそのためである。数日前、恋の外へ逸出しようとする朋子を認めたとき、恋の拒否の恐れに苛立った彼だったが、ここでは、恋の望みの喪失を、かえて「望み絶えたる恋」と美化しようとしている。以後、概して「恋」と「恋以上」との間を観念の上で迷いながら、止め度のない熱情のくすぶりが続く。そしてこのきわどい平衡の高みにせり上げられた感情の燃焼を定位するために、死の想念に短絡させてゆく。同じ手紙の端に、

われ独り居て君を想ふ時、毎に君が早く死すべきを思はざる能はじ。君は若くして死ぬ人なり。

という要吉の文字があるが、彼より早く独自の思想的——宗教的——要求から死を想っていたらしい朋子の、翌6日の手紙には、それに応ずるかの様に、

——我寂滅の日は、やがて君が寂滅と覚悟したまふや。

とあった。行きつくまでのちぐはぐな二筋道にもかかわらず、行手の窮極に死を遠望する点では暗合するものがあった。

ところで2人の関係について、伊藤整が

明子は興奮するほど、男性との接触には無関心になり、自分の内部に閉ぢこもり、森田から離れるやうに見えた。明子はそのエゴを棄てて森田に屈服することができず、森田は彼女の強いエゴの前で萎縮してしまふのが常であった。

この関係は明子に取っては、餌食としての鼠を前肢でもてあそんでいる猫のやうな、興味とスリルの連続であり、森田に取っては、性を餌として自分をおびき寄せながら、ヒステリックな発作の中に輻輳する明子の正体をとらへるための闘争であった。

といっているが、当時数え年で28才の草平（要吉）が、23才の雷鳥（朋子）に翻弄されているかにみえる姿を、やや戯画化して巧妙にとらえているといえる。だが、要吉の空しい闘争も、彼の自発的な要求の不可避的に屈曲した実現であることを見落すべきではないし、朋子についても、「鼠をもてあそぶ猫」にたとえられる程、ゆとりがあったとは思われない。

雷鳥は女子大卒業直前の20才の春のころの自身を回想して、¹⁷⁾

神経質で、憶病で、孤独ぎりで、人と口をきくのがひどく嫌ひという偏屈者で、自然友達といふものもなく、又ないのを何とも思つてゐなかつた。

といい、日暮里両忘庵ではじめて参禅したときに憧れ求めていたものは、

絶対とか、神とか、永遠とか、時間と空間とを超越した世界とか、靈魂のふるさととかいふやうなものであったとのべている。このように絶対的な世界を憧憬するとき、憧憬の心に火を点ずる現実的情熱と、絶対の世界に飛翔するための現実拒否とのあらいを免れ得ないのが常であって、しかも彼女の語る鬱屈した性格の中では、内面の亀裂は一そう大きなものがあったであろう。それから3年後の彼女が、たとい「慧薫」という法号を許されるほどの修禅をつんでいたにしても、そうした亀裂を克服し得ていたとは信じられない。

『煤煙』中の朋子に関する限り、草平の錯雑した叙述の中から、やはり緊迫した格闘のあとを探り出すことができる。そしてそれは、要吉の内部の混沌ぶりにくらべると、幾多のヴァリエーションを見せながらも、最後までほぼ等しい振幅を保っている。2月1日の「如何かして」の叫びと号泣、翌日の手紙における「火かきさらずば氷」の文字は、エゴ充足の欲求が、はげしい情火と冷厳な非情との間を飛び迷い、それらが振幅の両極をなしているのを語っている。要吉に似て、彼女も、かなり性的なエクスタシーに身を任せるほか「絶対」の世界への糸口をつかむことができないが、「絶対」に辿りつく前に、恋情の炎に身を熔かし去ることを極

度に恐れる。このことは、情死行の近づく3月19日付の手紙に、

(＊パッションが)余りに怖ろしい迄勃発しさうに成ると知った時は、大抵意力で制御して仕舞ふ。私は自分を制御する上に始終坐禅の力を藉りて居る。(6)

といい、『自叙伝』中の朋子の手記に「私はストイックが^{トキ}所好です」(8)とあるのにも現われている。

要吉が朋子とちがうのは、かつての隅江やお種との恋のアンチ・テーゼとして耐え得るような新しい恋の情景や情緒を必要とした点である。朋子の方は心情の内部だけの自閉的格闘の趣が強く、そのためにかえって、後日の要吉あての手紙に「私にとって自殺は自我の完成である」(『自叙伝』3)というように、死の観念に直結し易い。死に向かって自己をかり立てる刺戟物として以外は、たしかに要吉は「無視」された。

一方、要吉の方は2月中旬になって、

私は初め貴方の心を自分といふもので充した(＊充したい?)と思った。それが私の此世で抱いた一番大きな望みだった。併し最う其望みも捨てました。(2)

といいながら、

貴方は私を愛するんだ、愛せずには居られない。(2)

私は死ぬる。貴方と同じ^{コソ}因由でなら死に得る。併し貴方は貴方のために死に、私は私のために死ぬ。そんな事は逆も堪へられない。(2)

などと、矛盾した訴えをくり返している。同様に、さきの朋子の来信(3月19日)のあとでは愛は此女に取って勝利でなくて敗北である。自分が此女から愛せられるのは、此女が負けた時である。(6)

という、要吉としては最も正確な朋子への認識に達しながら、尾花峠行の前夜の温泉宿では、

貴方は私の為に死に、私は貴方の為に死ぬ。左様言って下さい。私を愛すると、唯一言。(3)

という最後の哀訴をくり返している。2月4日以来、正面切った恋情の要求や期待は断念したかに見えるが、恋ならぬある種の結合を恋愛めかしく仕立て上げることは必要であった。それは先にのべた様に、主として『死の勝利』に示唆された決意や目的意識にもとづいて、行動を先行させるための舞台作りのあせりに他ならない。こうした、狂おしい決意に醒めている、ともいえる矛盾をはらんだ意識が要吉の中に息づいている。その意識の眼で、夢想する情熱劇の成否をはかり、朋子の言動の解釈修正を試み、時には目的成就のために手を打ったりする。こうした部分が、恋情の要求と絶望との空しいくり返しにもまして、「煤煙」の恋の「人工的」な過剰を印象づけるのであるが、それ自体がこの恋の不可欠の一部であるのを無視するわけにはゆかない。朋子の意表外の言動に対して、癲癇の症候や偏狂と疑ったり(4)するのも、そのひとつだが、それも彼女を「自分の方へ引附けて置く為で有った」(7)。この憶測は「此女が禅学の支配の下に有るとは、如何しても考へたくない」故のあがきでもあり、更には、禅学に対する「自分の反感を誇大して、二人の関係を茶番にして仕舞ふ」(8)ことまで考える。『自叙伝』にもこれに似た記述があり、『漱石先生と私』では、「朋子をそれ(＊禅学)から切離そうと焦燥った事実」を煤煙事件理解の「鍵」のひとつに挙げているが、後年の回想だけに禅学を過大視する記憶のズレがあろう。

この間、妻の隅江が幼女・夏子をつれて上京し、幼女の急死、その遺骨を抱いての帰郷という出来事が挿入されている。隅江の登場は、朋子への愛の必然性を具象化する意図にもとづくにちがいないが、前にのべたように、お種の場合と等しく、隅江は既に終了した過去の恋の相手であり、従って朋子と対立して恋の葛藤を惹き起こす可能性は全くないのである。

隅江に取っては、斯うして何とも言はないで忍んで居るということが、一番此女の身に^{かな}適ったことかも

知れない。それが最も好く此女の美しい所、尊い所を発揮するのだ。自分はそれを知らぬのではない。恐らくは当人すら思い及ばぬ程に認めもし、同情もして居るんだ。それだけでも隅江は酬いられて余りあるではないか。——要吉は斯んな論理の不当なことも、為我一点張であることも気が附かぬではない。時には自分がエゴイズムの化身でも有る様に怖ろしく見えることもある。が、自分で自分が安心するためにも、何処迄も此理屈を押して見ずには居られない。(2)

ここでも、隅江に関しては、過去の人となっている彼女を強いて現在の地点に引き出そうとする苦渋があり、後段において隅江を対象とした愛の観念を処理するためのロジカルな動揺をのぞかせるだけである。冒頭の郷里で隅江に再会した場面では、「これでも嘗て要吉が放縦な空想を多かく対象に成った女だとは、如何しても思はれない。」(前引)と書いていたのを今一度想起してもよいだろう。

要吉はこうして、いわば後顧の憂いなく、朋子との愛の行動を進め、共に尾花峠を目指すことになる。「同じ因由」で死ぬという確言は得られなかったが、死を共にしてくれるという劇の進行を手放すわけにはゆかなかった。心底からの愛の結合を欠いたまま、お膳立てのみは最上の恋愛劇の体をなしていた。「同じ因由」でないからといって舞台から降りてしまえば、所期の目的を放棄することになり、何としても終幕まで漕ぎつけねばならなかったのである。朋子は

我生涯の体系を貫徹す、われは我が Cause によって斃れしなり、他人の犯す所に非ず。

という遺書を残す。ここにも強いエゴの主張と恋愛の拒否とがよみとれる。なおこの遺書は『自叙伝』にも再出するが、『朝日』紙上の『煤煙』では、

我生涯のこころを貫く。我はわが執れる路に依つて死せり。他人の犯す所にあらず。

とあった。このくいちがいの由来は明らかでないが、創作意図にかかわる変更ではあるまい。しかし終局の山上の場面の両テキストの隔りには問題がある。それについては後にのべよう。

*

『煤煙』の方法の様々の欠陥は既に指摘されて来た。例えば朋子を客観的に捉え得ず、隅江母子も「でく人形ほどにも描けていない」(清水氏)。隅江については、前述のように、すでに主題の中に喰い込む存在ではなくなっているのである。朋子に対しては作者の視座が執筆時においても定まっていなかった。構想に着手したと思われるころについて草平は次のように書いている。

第一、私には事件の渦中から自分を切り離して、第三者として観察することが容易に出来なかったのだから、これはどうも仕方がない。¹⁸⁾

従って「朋子に対する解釈も何う変わって行くか分からないような」状態であった。『自叙伝』から察すると、逃避行のちも、41年中は雷鳥との交渉が断続的につづき、「煤煙」の恋の達成を未だ夢みていた。次章でものべる様に、41年末雷鳥から絶縁状めいた手紙を受けとったらしく、以後雷鳥を相手とする恋は断念したものの如くだが、42年になると元旦から掲載のはじまった『煤煙』の執筆に追われながら作品の中では、朋子との恋を達成しようと努力していた。42年5月の『煤煙』完結までは、ともかくもこうして「恋の決意」がつづいていくと見るべきである。『煤煙』完結後、同年の夏が訪れるころになるとかなり事情がこたってくるが、同年11月の単行本『煤煙』第1巻刊行のころまではまだ余燼がくすぶりつづけていることは下記の通りである。

まず連載が完結すると、「明日からは何もすることがない」気持になり、¹⁹⁾ これは恋からの剝離を物語るし、かって夢見た恋情に対して批判的反省をもらす様にもなる。その頃書いたと思われる「落果」²⁰⁾の中で

『煤煙』一篇を貫く傾向は人工的と云うことである。此意味に於て自然主義とは頗る縁が遠い。要吉は人工的に生活しようとした。人工的に自から境遇を作って、其中の感情を味はろうとした。それに依て人生を豊富にするなどと云って喜んで居た。

と自己反省して、非「人工的」な「原始的感情」を力説しており、その具体化ともいえる小説「水死」（『新小説』、明治42・8）もこの前後の作である。「落果」での「人工的」の用語や文意の一斑は、『煤煙』連載中に漱石が日記に書きとめていた批評と符合する点が多い。

煤煙は劇烈なり。然し尤もと思ふ所なし。この男とこの女のパッションは普通の人間の胸のうちに呼応する声を見出しがたし。ただ此男と此女が丸で普通の人を遠ざかる故に吾々は好奇心を以て読むなり。しかも其好奇心のうちには一種の気の毒な感あり。彼等が入らざるパッションを燃やして、本気で狂気じみた芝居をしているのを気の毒に思ふなり。行雲流水、自然本能の発動はこんなものではない。此男と此女は世紀末の人工のパッションの為に囚はれて、しかもそれに得意なり。それが自然の極端と思えり。だから気の毒である。神聖の愛は文字を離れ言説を離る。ハイカラにして能く味はひ得んや。（明治42. 3. 6, 日記）

この高名な批評は、草平の「落果」より3月ほど先立つものだが、草平は漱石没後の全集編集の折にはじめて知った²¹⁾のであるから、偶然ならぬ偶然的の符合であった。しかし草平は、彼自らも認める「人工的」傾向を完全に棄て去ったわけではなく、これも「落果」前後と推測される『三四郎』評²²⁾で、煤煙事件とは因縁の深いこの漱石の作品が「常識の世界」にすぎず、しかし「美禰子だけは打捨てて置いても此作の中で終始する女とは思へない。もっと激しい舞台を別に持ってある女である」と書いて、後に彼も自認しているように「暗に『煤煙』を匂わせ」、朋子の優位を仄めかして、「落果」とはちがって依然「煤煙」の恋に肯定的である。もっとも「事件」からは1年余を経たとはいえ、連載完結後間もない自作になお自信を懐くのは当然であって、7月5日付小宮豊隆あて書簡にも、

三四郎の批評²³⁾は終に読んで仕舞った。「煤煙」の評²⁴⁾よりも遙に文章が面白い。推敲が出来てる。小説の結構の説明が明瞭で且つ興味がある。何故に君が三四郎の評で落胆して居たか分らない。この批評を読んで考へると、愈々煤煙評の粗雑で、不出来なるかを感じずには居られない。つまり君が三四郎に對する程深く煤煙にアンダスタンディングを有することが出来ないのだから。

と書いている。また『煤煙』のアンチ・テーゼとも見える前述の「水死」について、同じく8月17日付の書簡では「軽いシチュエーションの下に」書いたから「自分でも飽足らない」といい、

併しほんとうのシチュエーションを曝け出してかかるのは此次「バイエン」を書く時迄延しておくとのべているのである。

漱石と草平とのズレについては、イプセン『ヘツダ・ガブラー』に対する評価のちがいをめぐって、越智治雄氏の指摘²⁵⁾もある。ちなみに森鷗外は、単行『煤煙』第1巻（明治42・11）の序に代えて「影と形一幕二場」²⁶⁾と題する戯曲を寄せ、『煤煙』を諷刺した。第1幕には『死の勝利』のデオルデオ、ヒポリタ2人の「影」が対話をかわし、この心中者の胸奥の疎隔を描きながら、男の影の「縦ひどんなに打明けても、一しよに死なうと誓っても、本当に一しよに死んでも、破ることの出来ない鉄壁の隔てがある。その鉄壁を無理にどうにかして破らうとするのが妬だ。」という台詞に達し、最後に「デカダンス風が多少吹いてゐるかも知れないが、まだ大分郷土の土臭い匂が残ってゐる見込」（男の影のことば）の日本で再生しようということになる。そして第二場は猿楽町の会堂。そこには要吉と朋子が登場するが、要吉に「一体恋といふものは、笛の歌口を強く吹き込むやうに、一人の女を劇しく恋ふるのが本当の恋でせうか。それともピアノの鍵盤の上に指を走らすやうに、女の唇から唇へ早く移って行って、其間に諧音を見出すのが本当の恋でせうか。」と云わせている。鷗外は、死を共にする

ほどの恋にも介在する心の隔りと、節操なき恋の可能との両面から、「煤煙」の恋に疑問を提出したといえる。

ところで草平も同じ42年秋の小説「扉」²⁷⁾は、要吉・朋子と同じモデルらしい男女を扱い、女の視点に立った描写をもまじえて沈静した作風を示し得ている。しかし題材を「煤煙」以後にとり、主題も『煤煙』からずれている。なお後年(昭和2年)、アナートル・フランスの『タイス』訳出の際、

若し私が『煤煙』を書く前に『タイス』を知っていたら、もう少し明白に、もう少し力強く自分の主題を生かすことが出来たらうと残念に思はれるのである。²⁸⁾

といい、両者の関連を説明している。しかし『煤煙』以前に『タイス』を知ったとしても、『死の勝利』と同様、恋の行動を鼓舞する役割を受け持つ破目になったのではなからうか。

さきの「人工的」の語は、漱石においては第三者から見た情感の質を形容している観があるが、草平自身は「意志的」「意図的」に近い用法と見える。一高以来の僚友であり、煤煙事件をめぐる草平とは因縁の深い生田長江は、好意的な理解を示しつつ草平を次のように批評している²⁹⁾

草平氏に取つては、その生活を出来得る限り詩的に営まうとすることが、第一の要求であり努力である。

氏に取つては、出来得る限り詩的に営まれたる生活を、出来得る限り詩的に告白しようとするのが、第二の要求であり努力である。

また「自らにして受くる」「経験」と「進んで取る」「実験」とを区別したのち、「草平氏の生活は経験であるよりも実験である」という。これらの言は、一面では恐らく長江の意図を超えて、草平の、生活と芸術に対する異常な「意志」の支配と「行動」の先行とを認めたことになる。これは、『煤煙』における、例外的に過度の「人工」性は別として、草平の前半生を通ずる生の様式であった。宮本和吉が、

多くの作家の間にあつて独特の技量をもっているのは森田草平氏である。氏の世界は所謂ロマンチックの世界ではない。憧憬に生きるロマンチックの世界ではない。只氏は思った事をドンドン実行して事実を創造する力を有つてゐる。思想と事実の間に氏に於ては普通の人³⁰⁾の如く逡巡と躊躇がない。此点が氏の作に於て特に目立つ。

といったのも、ほぼ正しい。しかし恋愛の様に、一方的な「実行」で成り立ち難い場合は、結局「決意」に統括されながらも、個々の局面では、さまざまな意識が派生することになる。このことが作品の内容面に波及することは先にのべたが、恋の決意に醒めた心情的な意識の介在という、ユニークな構造が、そこに成立する。

小宮豊隆が「到る処に要吉ならざる作者が出て来る」といい、

朋子と会つて話をする時でも、時々作者が陰から出て来て、要吉の空想の中に這入り込んで、なんだかんだと云つてゐる。なんだか芝居の台詞みたいだとか、なんだか滑稽に感ぜられるとか、あゝやうして仕舞へば訳はなかったのに、とか色々云つてゐる。

などの例をあげた³¹⁾のもそれである。ここにいう「作者」は、恋の遂行の決意を秘めながら、陶酔や憂慮等々をくりかえす意識の眼にはほかならない。清水氏³²⁾のいう「思わせぶり」「思い入れ」などもここに起因する。同氏の挙例の一二を借りれば、「要吉は口元に寂しさうな笑ひを浮べて、女を振向いた」、「と言ひ差して声を濡ませた」(9)のような言い回しは、劇の進行を見守る眼で自身の劇中の苦悶を哀憐する声であろう。しかしこの眼の介在がこの作品の長所にもつながることは後述しよう。

『朝日』紙上の『煤煙』完結後、「煤煙」の恋の夢から遠ざかりつつも、その「解釈」の手直しはつづいた。手直しがつづく限り、それはある意味で恋の継続であり、その細部は『自叙

伝』が伝えている。また先の小宮豊隆あて8月17日の書簡に「此次『バイエン』を書く時」とあるのにも、『煤煙』への執着がうかがわれよう。「次のバイエン」が改稿であろうと「第二のバイエン」を意味しようと、同じことであろう。その手直しを既往の『煤煙』について行なった痕跡は、単行出版のための改筆に認めることができる。部分的改筆は全篇にわたっているが感情や心理の把握・描写のきめ手を探りあぐねているのが目立つ。ここではほんの1例だけあげておこう。20章に挿入した一節には次のような箇所が含まれているのもそれである。

先方の奴隷に成って、相手を支配する——そこに一種の類廃した快感がないではない。

また全面的に書きかえているのは、単行本7～9章の、要吉帰京直後に、お種の登場する部分であり、最も興味があるのは、末尾の尾花峠山上の場面である。試みにほぼ等しい長さで両テキスト最終部を切りとって対照してみよう。

(新聞初掲本)

「歩きませう、最^もと歩きませう。」

「ちゃ、吹倒される所まで。」

二人は風の中を行く。雪が凍て始めたので、足を踏み込む恐れはないが、路は全く雪に埋もれて、山の斜面を行くに異ならぬ。要吉は前に立って、一足づつ足場を造って進んだ。一つ踏み外せば谷底まで落つる外はない。

朋子は足を踏み外した。男もそれを引上げようとして、二人はずるずると一間許落ちたが、危うく雪の凹みに折重なって留った。

二人は其儘動かない。風の音が段々遠く成った。偶と眼を開いた時には、月天心に懸って、月下の連山は死んだものゝ様に寂^{ひび}かに見えた。久らくそれに見惚れたが、朋子はと見ると、雪に顔を埋めたまま、息あるものとも思へない。熱を持った唇だけが生きてるやうに見えた。

要吉は立上って、懐の短刀を谷底目がけて投げた。永しへに人の眼に触れないで、永しへに錆るであろう。

(単行本)

「ね、歩きませう、もっと歩きませう。」

女は急に男の手を持って、同じ事を繰返した。

要吉は黙って立上った。見返れば、月天心に懸って、遠^{きよ}方の山々は宛^{きま}り大洋の濤が其儘氷った様に見えた。わが居る山も、一面に雪が氷って、きらきらと水晶のような光を放った。あゝ氷獄！ 氷獄！ 女の夢は終に形を与へられた。到頭自分は女に伴れられて氷獄の裡へ来た。——男の心には言ふべからざる歡喜の情が湧いた、最^もう可い。最^もう可い！ 二人は手を取合つたまま、雪の上に坐^{すわ}って居た。何^{なん}も言ふことはない！

二人は又立上った。堅く氷った雪を踏みしだきながら、山を登って行く。

山嶺も間近に成った。

だんだん月の光がぼんやりして、朝の光に変わって行く。

この部分に関する限り、前者は素朴で写実的であり、最後の1行は、過ぎ去った恋の波瀾を一場の夢として印象づけようとしている。むしろ哀感を漂わせることによって、かえって共感を誘う効果をねらってはいるが、一応おのが恋に対して否定的である。後者は全く反対に、恋の完成を強調している。例の「火かさらずば氷」の字句のある朋子の手紙(2月2日)に見える「氷獄」を出現させて恋の首尾を整え、極力美化・幻想化し、希望と歡喜にみちたフィナーレに仕立て上げたのである。これは、「煤煙」の恋に、連載時にもまして大きな夢を託した外観を呈しているが、恐らく逆に、切実な「煤煙」の苦悶とは別のモチーフでロマンとしての装いをこらしたのにちがいない。いずれにせよ恋への執着が消失したとはいえないことを物語っている。

なお、新聞連載中、内務省警保局からの警告もあって、春陽堂が出版を躊躇し、明治42年11月～大正2年11月の間に、4分冊に分割して刊行される結果となった。従って最終場面の改筆

時期の推測が困難になるが、42年秋までには一応改稿全篇の推敲を終わったものと考えたい。

*

『煤煙』のもつ長短両面は、例えば次の両氏の要約のように考えることができる。伊藤孝子氏は、『混沌とした草平の文学』にもかかわらず、『煤煙』によって深い自意識の発展に悩んだ知識青年層、特に女性の自我を刻明に描いたとし³⁴⁾、清水茂氏は、『煤煙』が「その失敗したぶざまな姿のままに、いくたの優越性を備える『三四郎』の「アンチ・テーゼとしての史的意義をうしなわない」というのである³⁵⁾。その史的役割や意義が、「混沌」や「ぶざまな姿」と表裏することもおのずから指摘しているわけだが、草平文学の展開の中で考える時、長短二面の不可分の姿を一層強く感ずる。だがその不可分の度合は『煤煙』を形成するそれぞれの部分によって一様ではない。

『煤煙』の本体は、いかに「ぶざま」であっても、要吉と朋子との「恋」の展開部にある。その「恋」は明らかに観念的要求に発しており、漱石日記が批判したように、恋愛の真髄を發揮したものではない。しかし、留意されるのは、「恋の観念」への憧憬にとどまったり、実行の入口での挫折を抒情化したりしたものでなく、窮極まで実行しつくした点である。それを虚構の中で果たすことが期待されないとすれば、決意と行動の先行が必要条件であり、とすれば不可避的にさまざまのヒズミを伴うという関連が生ずる。従って中心主題である「煤煙の恋」に関しては、長短両面を切り離して考えることは殆んど不可能といえる。

次にこの作品の難点は、郷里の場面と隅江・お種の登場とが、作品の中で朋子との恋と葛藤する有機的結びつきを欠いていることである。この点に関しては、郷里の暗さや2女性への愛から既に遠くかっている要吉として彼を設定しなおす、という修正を仮想することが可能である。そうすることによって、例えば、郷里における要吉と朋子に対する要吉との間の、あの奇妙な印象のズレを克服できるのではなからうか。しかし原作における「連絡のなさ」のままでも、そうした疎隔を消極的に印象づけ、新たな「恋」への盲目的な突進のリアリティを保証する役割のいくらかを果たしている。

草平の創作活動が後退し翻訳が仕事の中心になる長い中間期を迎えるまでは、先行する行動の質によって文学の質が変わり、行動の衰弱と共に文学が衰弱するという相関関係を持続している。しかし『煤煙』を評価するのに、作品に先行し、またその題材となった行動に照準を合わせることは、むろん間ちがいであろう。その題材をいかに描き得たかが問題でなければならない。その点については既に方法上のヒズミにふれてきたが、その短所がやはり長所と背中合わせになっているのが認められる。

吉本隆明は『言語にとって美とはなにか』³⁶⁾の中で、

森田草平の「煤煙」は、この時期の文学体の表出の水準をかながえるばあいきわめて重要である。この作家が、この一作のほかにもみるべきものがなかったとすれば、「煤煙」は、まさに表出をつぎの段階にすすめる触媒の役割を果たして消えたものであった。たとえば漱石が「それから」によって文学体の表出史にはじめてはいりこんでくるために「煤煙」は無形のおおきな影響をあたえたものとかながえられる。

そしてつづけて『破戒』との関係に言及して、

「煤煙」は、藤村の「破戒」とおおきく結縁する。(中略)藤村が「破戒」を生みだすにいたった自己表出の根源には、親戚や他人の冷飯をくい、たえず感情を抑圧しながら生活しなければならなかった青春時代の自己体験があったに相違ないように、「煤煙」には草平の生い立ちもふくめて、いわゆる煤煙事件の直接の鬱屈があった。これが「破戒」と「煤煙」とをつなぐ根源的な結縁であったことはうたがいない。

といい、

景物の表出は、一種の娑婆苦、世界苦の象徴をおびる。

として、花袋の『一兵卒』と比較しながら、『煤煙』の表現の位相を次のように説明する。この難解な書物の所説を要約するのは困難であり、再び長文の引用になることを許されたい。

「煤煙」の表出は、対象描写と移行描写とが同在して二重性の含みを持続する。この含みが景物描写をささえ、色濃く表出位置からの作者の意図をふくむものとして存在せしめている理由である。「日は沈んで、脚下の町の屋根から向いの高台へかけて、一面に薄い霧が懸っている。……」（*工場の煤煙を望見する場面——19章）という景物は、<二人>から眺められた位置で描かれているとともに、作者の位置から対象描写されているという二重性の含みを見事に表出している。これが「破戒」から「一兵卒」へとわたる文学体の峰づたいの頂を、さらにつきすすめている要素である。森田草平によってそれが意識されていたと否にかかわらず、景物描写でさえ、作者の現実的なたたかいの意図をふくみうる自在さにこそ「煤煙」のあたらしさがあった。これについてはいわゆる<煤煙事件>などは無縁にすぎなかったとさえ極論することができる。

以上の所論のはじめの方で、『煤煙』の自己表出の根源には「草平の生い立ちもふくめて、いわゆる煤煙事件の直接の鬱屈があった」といい、後には「いわゆる<煤煙事件>などは無縁にすぎなかった」といっているのがチグハグとしかよみとれないことも含めて、文脈に即して十分に理解することはできない。しかし「世界苦の象徴」「二重性の含み」「作者の現実的なたたかいの意図をふくみうる自在さ」などのことばから、『煤煙』の文体の新しさが想定できる。

『煤煙』の表現の「二重性の含み」は、やはり「煤煙事件の鬱屈」に根源がある。例の、「恋」の決意を秘めた行動が結局「思わせぶり」や「身ぶり」を露呈させたけれども、それと同じ根源から、内面に秘密や不安をかくしながら外界を感受してゆく、新しい叙述も成立したのである。小宮豊隆が苦言を呈した「作者の介入」の裏側に、吉本は別のメリットを見たともいえるのである。

人気絶えた会堂の中は、人の肉を得て、急に四方から陰森の気が迫る様に思われた。要吉は椅子を引寄せて、女の座を設けたが、朋子はそれに掛けようともせず、男の傍に立って居た。⁶⁾

この文章の、特に前半に、悲劇めかそうとする、かすかな嫌味が漂うが、同時に外界とそこに移し入れられた内面の影とが重なり合う「二重性」の表現が成り立っている。『破戒』の場合には、そうした二重性を描きながら、全体として抒情の中に導き入れられる。恐らく『罪と罰』などのロシア文学に触発されて、『煤煙』の表現のこうした新しさが芽生えたのである。

- 1) 平塚雷鳥『わたくしの歩いた道』(昭30.3)による。『煤煙』では「末日」。
- 2) 熊坂敦子『『煤煙』の発想』(『国文目白』第1号、昭37.3)の指摘による。
- 3) 『漱石先生と私』、なお『自叙伝』では「男女二人の為に弁ず」とある。
- 8) 12) 18) 19) 21) 森田草平『漱石先生と私』
- 4) 32) 33) 35) 清水茂「二葉亭・漱石・鷗外——『煤煙』事件をめぐる」(『日本文学』昭32.3, 4, 5・6)
- 5) 夏目鏡子『漱石の思い出』、夏目伸六『父・漱石とその周辺』
- 6) 11) 24) 31) 小宮豊隆「ダマシテオの『死の勝利』と森田草平の『煤煙』」(『ホトトギス』明42・7)——『明治文学全集』75による。
- 7) 20) 森田草平「落果」(『新小説』明42・7)——同上。
- 9) 13) 15) 拙稿「初期の森田草平」(『岐阜大学教養部研究報告』第4号、昭44・3)
- 10) 森田節男氏(草平の三男)の談話による。
- 14) 森田草平「サッフオの思い出」(『文章倶楽部』昭2・3)——上掲拙稿でもふれた。
- 16) 伊藤整「森田草平と平塚雷鳥——日本文壇史第121回」(『群像』昭38・5)
- 17) 平塚雷鳥「参禅した頃」(『雲・草・人』昭8による)

- 19) 森田草平『自叙伝』
- 22) 森田草平「三四郎」(『国民新聞』明42・6)
- 23) 小宮豊隆「『三四郎』をよむ」(『新小説』明42・7)
- 25) 越智治雄「日本におけるイブセン—ヘッダ・ガブラー」(『明治大正文学研究』16号, 昭30・5)
- 26) 森鷗外「影と形 一幕二場—煤煙の序に代ふる対話」(『煤煙』第1巻, 明42・11)
- 27) 森田草平「扉」(『新小説』明42・10~11, 作品集『トビラ』明44・5, 『明治文学全集』75所収)
- 28) 森田草平・関口存男共訳『椿姫・タイス』(昭2・5)「解題」
- 29) 生田長江「人として芸術家としての森田草平氏」(『新小説』大2・2)
- 30) 宮本和吉「44年文壇の回顧」(『新小説』明45・1)——『明治文学全集』75による。
- 34) 伊藤孝子「森田草平」(『学苑』昭30・8)
- 36) 吉本隆明『言語にとって美とはなにか』(昭40・5)

2 煤煙以後と『自叙伝』

——「朝日文芸欄」のころ——

世上にいう「煤煙事件」つまり草平と雷鳥との逃避行そのものは41年3月であり、その体験の文学化である『煤煙』の執筆・連載は42年5月に終わったけれども、その間雷鳥との交渉はつづき、「煤煙」の恋にかけた草平の夢はさめやらず、それらが下火になって後も、余韻は草平の内部でしばらく尾を引いた。それが消滅するのは、明治44年の「自叙伝」の新聞連載とその続篇「未練」の発表によってである。従って「事件」以降、「未練」発表までの3年半は、草平にとって「煤煙以後」ともいふべき一時期であった。そのうちの初頭期に当たる、『煤煙』完結までの1年間は、その執筆に追われており、完結後の2年半が、「煤煙以後」と呼ぶのによりふさわしい期間であるが、その大半は、「朝日文芸欄」(明42・11・25~44・10・12) 編集時代とほぼ重なり合っている。草平にとって「朝日文芸欄」は重要な意味をもつが、ここでは主に「煤煙以後」の観点から考えることとした。

「煤煙以後」はまた、『自叙伝』の題材になっている時期でもある。従ってこの時期の問題の半ばは、後に『自叙伝』を論ずる折に譲らねばならないだろう。なお『朝日』紙上連載の「自叙伝」が取り上げた時期は、ほぼ42年末までであり、続篇「未練」でそのあと44年4月までを扱っている。ところが単行本『自叙伝』(明44・11)は前記「自叙伝」の末尾に修正を施し「未練」をつけ加えて、まとまった一篇の作品の体としたのである。従って両自叙伝を区別して扱わねばならない。(本稿ではそれぞれ「」と『』との記号で区別することとした。)

「煤煙以後」数年の草平の姿と、その時期を扱った『自叙伝』の世界との間には、かなりのギャップがある。むしろ『自叙伝』は煤煙事件の後日譚という主題にしぼった創作であり、生活者および作家としての草平のすべてを蔽うものではない。しかしとりわけ、「煤煙以後」のはじめの1年間に、あの熱っぽい『煤煙』の制作に取りくんでいた草平の姿と、「煤煙」の体験そのものに自己省察を注ぐことの多い、『自叙伝』中の同じ時期の彼の姿とは、容易に重なり合わない不可解ささえあるのである。だが『自叙伝』は、題材の第1年目の明治41年についていえば、3年近く遅れて書かれたことを知らねばならない。つまり『煤煙』を執筆する草平とその草平が『自叙伝』中に見せる姿とのギャップは、この3年間の年月の経過が生み出したものであり、そこにこそ「煤煙以後」の実質が横たわっているのである。

従って『自叙伝』から過去の草平を推測することには危険が伴うが、「煤煙」の恋に依然として夢をいだき続け『煤煙』に熱い息吹きを注ぎこんだ草平の姿が、縮小した形で点綴されて

はいる。「事件」後1月くらいに相当する箇所に、

併しあの女は何処迄も一人であゝ成ったことに置きたい。あの女以外の他の要因から影響を蒙ったといふことは——例へば禅学のやうな——逆も堪へられない。

とある。これは前章にふれた様に、『煤煙』で要吉の願ったとおりなのである。また、雷鳥への不可解さと、それがまだ牽引力の根源になっていることにもかわりはない。

それにしても、偽善者か、男蕩^{たう}しか、抑又物狂^{そもそも}ほしい情熱に悩まされながら生きて居る女なのか。恐らくはその皆なのであろう。

そして

私はあの女の上に戯曲を書いた。

凡て男の恋は皆女の上に戯曲を書くものだ。私も其例に洩れなかった。(中略)あの女は私の影に過ぎない。私は自分の影を抱いて、山迄死に行つた。

と、『煤煙』の行動を美化している。一方、雷鳥の方にも以前に変わらぬ欲求がある。4月30日付長江(神戸)あての書中に、

さすれば死が唯一の興味である。かう成れば(真の孤独となれば)、以前の我にかへって、三年以来のわが夢を実現し、氷獄に端坐して凍死することも出来るかと思はれます。

と書いている。この手紙を借りて熟読した草平は、「ままよ、同類は同類に行く。私は矢張^{はか}あの女の行く所へ行く外はない。」と胸中で叫んだりしている。

『自叙伝』が事実に近い状況を伝えているとすれば、『煤煙』以来のくいちがいと、いくらか低下した熱気を通わせながら、41年中は2人のやりとりがつづいている。時折草平が、

こんな事を考へるのは、矢張空想に駆られて居るのかも知れぬ。自分一人の想像で拵へて居るだけかも知れぬ。(6月はじめ)

矢張私は世間見ずであった。如何したって、普通の人は私達の思ふ様になぞ考へて呉れるものではない。(7月8日)

などの反省を見せながらも、「あの女から来る手紙の中に生きて居た」(11月)のである。「事件」後、41年の暮までの8ヶ月余の間に女の手紙は11通を数え、長文のものも多かった。(『漱石先生と私』によると、『煤煙』『自叙伝』中の雷鳥の手紙は事実そのままらしい。)また雷鳥の東京宅と茅ヶ崎で再会した(いずれも6月)らしい。彼女の母親とも会っている。

41年11月、『煤煙』の『朝日』紙上連載決定の報を漱石から得て、¹⁾草平は狂喜したが、それから間もない12月9日付の次の手紙が、雷鳥最後の来信であった。そのはじめには、

私は非人情で申します。私の意思は全然変りました。自分のことは自分で処理いたします。

とあった。草平は雷鳥との関係の終焉を感じた様である。

思へば、長い間であった。私はあの女——あの女と云ふよりは、自分があの女の為に抛つた過去^{なげう}に対する未練から、如何してもあの女から離れまいとした。あの女と離れたが最後、私の手には何もかも残らぬ。それが辛さに、何んな凌辱にも堪へて来た。

という記述でもそれはわかる。だがこの文章の中でも、「あの女の為に抛つた過去」つまり『煤煙』の恋の、いわば精神ともいふべきものを否定してはいない。

私は二たび現実の世界から空想の世界へ逃げた。二たび死物狂ひに成つて製作に取りかゝつた。

そして『煤煙』の原稿を書き貯めながら、

あの女とは別れたが、あの女のために書くのだと云う心持は離れない。

という状態であった。こうして見ると、前章でもふれたように、41年暮の絶縁状態の雷鳥の手紙を受けとるまでは、雷鳥を相手として『煤煙』の恋の成就を依然として夢みていたふしがあり、それ以降は、現実の雷鳥には見切りをつけ、作品の中で恋を成就しようとする心境に変わっていった。ただしこの小説が彼女に「何とかして近づく道」のきっかけを作ってくれる期

待を捨て切るまでにはいたっていない。『煤煙』は42年正月元旦から紙上に連載されはじめ、苦しい執筆がつづく。

『煤煙』完結の近い5月9日付の母の手紙が郷里から届き、つね（隅江）の再婚を報じてきた。草平は一しきり感慨にふける。また、その前後に正定院からもとの下宿伊藤ハル方へ戻った²⁾のが事実だとすれば、これも草平の胸中にかなりの変化が生じたのを想像させる。伊藤ハル方はいうまでもなく、岩田さく（お種）の実家であり、再び彼女への接近の望みが芽生えたとも考えられるからである。

ひそかな期待を裏切って『煤煙』完結後の雷鳥の反応はなかった。わずかに翌6月(?)臨時増刊の雑誌に「偽らざる告白」と題する文章のり、

私はストイックが所好です。堅忍にし情に動ぜざる底のものでなければ人間は駄目だと思います。

という書き出しで始まっていた。『煤煙』については、

少くとも朋子と私とは関係がある。併し『煤煙』が既に芸術品である以上は、芸術の堂に参じたことのない私などは、一歩半歩も立入ることは出来ません。

と受け流し、もっぱら見性や修禪の体験の説明に筆を用いており、草平は彼女が「白っぽくて居るのぢゃないか」とも疑い、すべてに不満を感じた。そして夏になって雷鳥との距離を一層大きく感ずるようになったらしい。『自叙伝』の言廻しがそれを物語っている。

あの女—あの女ともあれ限りに成った。こうして此儘をはるのが物の順当であろう。少くとも無事だ。それにしても、長い夢を見たものだ。

また

あゝ、俺の小説もをはった。

私は又其言葉を想い出した。おれの一生のロマンスは終わった。

とも書いている。ここまできると、自分の描いた夢や幻想への批判的な反省すら姿を消している。反省のある限り、愛との格闘が尾を引いているわけだが、その格闘までも抱えこんで過去の薄明の中に遠ざかっていったのである。このときふと「いっそ『顔』と云ふ題で小説を書いて見ようか」と思い当たる。無論、雷鳥の顔を題材としてである。

あの女の顔—すべてが消え去った中に、あの顔だけが残った。何方を向いても可厭な思い出の中に、只一つあの顔だけが私の瞳子の底に焼着けられたように残った。

のである。これは雷鳥との出会いの時点へ立ち戻ったことを意味した。最初に印象づけられた彼女の額の「冥府の烙印」——それは恋が進んで後、ニコライの会堂で遠目に見た時も浮かび上っていたものだが、長い恋の模索からくぐり出て来たとき、最後に彼の胸中に残ったものは「顔」だけだったわけである。これは42年の秋も深まった頃のことらしい。小宮豊隆にも、

君の書いたものは今迄どうしても君の書いたものであったが今度は僕が書いた気がする。あの内容(* 具体的に何を指すかは不明)で僕は小説「顔」を書こうとして居る

と書き送っている。これが11月24日(消印)の書簡であることから、「顔」の着想をその前後と考えることができる。ところがその数日後、市電の中で雷鳥とめぐり合い、一夜を共に過した。これがこの年ただ一度の、そして生涯最後の邂逅であった。以上は『自叙伝』をたよりに書いて来たが、紙上連載の「自叙伝」はほぼここで中断されている。

これより先、6月頃母とくが上京して伊藤ハル方で生活を共にすることになった。またこの6月には前章でふれた『三四郎』評を『国民新聞』紙上に書いている。夏の訪れた頃から、雷鳥との距離感が大きくなったらしいことはすでに述べたが、これも前章で既述のエッセイ「落果」(『新小説』明42・7)で「煤煙」の体験を「人工的」と反省した時期的符合も考えられるわけである。

草平は自筆「年譜」³⁾に、大正4年までに「離合」以下10数篇の短篇小説を書いた中で、わ

ずかに「初恋」が漱石の「お褒め」に預り、戯曲「袈裟御前」に自信があるのを除くと、「他は皆云ふに足らざる劣作乃至間に合せもの」といっている。このうち『煤煙』完結後の第1作「離合」をはじめとして、「未練」(明44・10)までの「煤煙以後」の時期に少なくとも7篇を発表している。それらは草平のいう「劣作」ほどではないにしてもそれぞれ難点がある。しかし漱石門下の交わりに刺戟されたらしい試みの片鱗をうかがうこともできる。ときに虚構をまじえ一作毎に作風をかえるなどの工夫の跡が辿られるのである。

漱石・草平の師友の間に文学の志向のちがいがあことは知られている通りである。草平のロシア文学心酔と時折それに対して見せた漱石の否定的反応、『煤煙』と漱石の批判などは挙げるまでもない。逆に『三四郎』への不満を示した草平の批評については前章でふれた。しかし草平の主観的意識の中では漱石に背を向けたような気配は感じとれない。むしろそこでは漱石への人間的信頼と恩義が重要な要素となつていよう。煤煙事件以前にも一身上の秘密を真っ先に告白したのは漱石に対してだった。上記の『三四郎』評をめぐって、小宮豊隆あて書簡(明42・6・19)に

三四郎評の駁論(*小宮「『三四郎』をよむ」——『新小説』明42・7——の草稿を指すか)はあれから色々考へて見た所がどうも僕が先生を愚弄すると云ふ僕の人格のことだけは何卒内輪だけにして削って呉れないか、今日の場合そんな事が公に成ると僕は全くEhre(*面目, 名誉)を失って葬られて仕舞うからね、左なきだに世間は何とか云いたがって居る所なんだ。それに僕だつて実際先生に敬意を失してる様に云はれや寝覚が悪いものね。

と書いているのも、主に人間的な心情についてであり、背後には文学観そのものに関しては譲らないことを匂わしている様にもとれる。だがやはり文学的にも、漱石に対峙する意識を明確にもつことはなかつたと考えざるを得ない。それは『漱石先生と私』中に見える、漱石作品への感想を見てもわかる。そして草平を心服させたのは漱石の創作力や巧みさであった。翌年秋の豊隆あて書簡(明43・10・28)に

短篇集を校正して居てつくづく自分の無才に驚いた。勿論あの中に書きたくて書いたものは一つもない。併しいゝ加減に書いて而も旨くなけりや駄目じゃないか。そこへ行くと先生はエライね。

と書いている。長江の指摘した「想像力の乏しさ」⁴⁾は彼自身痛感していたはずである。以上につづけて、

併し一つ驚いたことは六つの短篇が六つながら自分のことを書いてをらぬことだ

とあり、所収篇数が合致しない点に疑問が残るが、ここにいう「短篇集」は恐らく『トビラ』(明44・5、佐久良書房、5篇収載)であろう。ここに収めるのは「離合」など、「煤煙以後」の所産で、彼自身「自分のこと」を書いていないのに驚いているが、個々の制作には、告白的な『煤煙』とちがった世界と技法を意図したにちがいがなく、『煤煙』の世界への執着はそれとして、漱石的な「旨さ」を身につけようという願望はあつたであろう。草平は自己に欠落したものを漱石に求め、漱石もいくらかは草平に求めるという相補的な欲求が師弟をつなぐ牽引力の一部をなしていたと見るべきであろう。

「離合」(『中央公論』明42・8)は郷里の村内にただ一軒の番太の家を舞台としている。その家には一種の自由で開放的な雰囲気があり、たえず流れ者が訪れ寄食したりした。草平は幼時から何の抵抗もなくこの家に入出入し、その雰囲気にはひかれていたらしい。ここに登場する女郎上りのお重(おそらく実名、『煤煙』のお倉ほか、多くの作品に登場)がなじみの客・岩吉をむこととして伴って突然帰宅し、しばらく同居するが、商売に失敗した岩吉はひとり台湾に渡り、やがて消息が絶えるというのが中心の話題である。情義も感傷もない、非情な「離合」が題名の由来であろうが、同時にこの家の雰囲気や情景を象徴している。その他、お重につきまとう少年・嘉

一、それをひそかに嫉視する啞の少年・彦作、彦作の飼育する青馬^{あおま}の死で結ばれる幕切れなど、農村の片隅に営まれる生活の姿がかなり手際よくまとめられている。少年・嘉一は、幼時の作者の分身であるらしく、お重一家や村落の様子をその視点で描写する部分が多いが、お重夫婦の「離合」のいきさつに筆が及ぶとき、当然少年の視点からはみ出してしまい、従って作品全体の焦点がぼやけたうらみがある。総じて草平の作品には、視点の不安定な転移が欠点となっている場合が多い。

「水死」(『女子文壇』明42・8)の主人公は寺の一室に下宿している学生・「私」である。「私」は「何でも無い物にまで意味を着けたが」り、「一人で幻影を拵へて、一人で其幻影に捕はれる癖がある」。その様な自覚から、

単純なものが複雑な人に同情することも出来ないが、複雑な頭で其まゝ単純なものに同情しようとするのは、最そつと間違つたことであろう。

という自己反省をしている人間ではある。その単純な人間として登場するのが、寺の梵妻の連れ子、24才のお須磨さんである。お須磨さんは針仕事をしてひっそりと暮らしているが、書き物に明け暮れる「私」の苦しげな様子に、ある日同情のこぼれをもらし、「私」は涙を流す。翌々日お須磨さんは失踪し、寺の隣の鍛冶屋の小僧・庄作も行方知れずとなる。その日お須磨さんは水死体となって発見される。その夜「私」はお須磨の来し方を思いつづけ、「女は黙って居ても死ぬものだ」と痛感する。そして「知識の発達しない女」に「深い感じ」や「複雑な情緒はない」と思ったのは間がいで、「自分の持つてゐる感情に名を付けることを知らない」だけであり、「先づ新しい感情の名を教へられて、夫から其感情を味はひに取かゝるやうな、われわれ程度し難いものはなからう」と考えるのである。ここにいう「感情の名」とは「感情の観念」または「観念的感情」であり、それを「度し難い」として、お須磨さんの沈黙の死に深い感銘をうけているところは、前章でものべた様に、「落果」に見せた「人工的」模索や体験への自己批判と軌を一にするものがある。書き物に明け暮れる「私」に対するお須磨さんの同情に感動して涙しながら、「こんな人工的工夫をして、それでも涙が出るものだとは、私も此頃始めて知った」とあることから、強い結びつきが知られるのである。しかし、草平が此作に満足していないことは、次の書簡(明42・8・17、小宮豊隆あて——一部前章引用)を見てもわかる。

○僕はあゝ云う気持を感じるためには「水死」に表はされたよりはもっとシリアスな困難なシチュエーションに立って感じて居るのだ。其シチュエーションを隠して、もっと軽いシチュエーションの下にあんな気持だけを書いたから、頭へ強く響かんのだろう。自分でも飽足らない。併しほんとうのシチュエーションを曝け出してかゝるのは此次「パイエン」を書く時迄延しておく○昨夜所用ありて晶子に会ふ。晶子曰く、お寺にあんな娘さんが有るんですか。イエ丸切り形無しなんですと答へると少し目を丸くして居た。

「ほんたうのシチュエーション」とは、恐らく草平の分身がもっと作品のただ中に登場しなければ成り立たぬものだったろう。この作品の「私」、寺、書き物には、それぞれ草平、正定院『煤煙』が連想されるが、一応虚構の作をねらっている。しかし彼の場合「飽き足らない」成果しか得られなかったのである。

「扉」(『新小説』明42・10~11)も、前章で言及したが、草平と雷鳥とをモデルとするらしい戸崎・敏子が登場する。題材は恐らく煤煙事件以後で、『自叙伝』と重なり合うであろう。この作品の特徴のひとつはヒロインの側からの叙述が多い点であって、主人公が作者と一体化した『煤煙』や一人称形式の『自叙伝』とは著しく趣きを異にする。しかしそれも、『煤煙』や『自叙伝』で主人公が女の心事を探りあぐねた想像の裏返しにすぎない。

男の為ることも、自分の為たことも冷静に見て居た。人目を盗んで言い寄る男の言葉が、とどらまどらで意味を成さぬのを聞いて居るのも面白かった。思う存分に云はせて置いて此方の一言で急に消気返るのを見るのも、何となく嬉しかった。又或時なぞは向うの心次第に成る積りで大胆に身を投げ出して居ても、男の方で恠懼して、容易に手を下し得ないのを静と待って居るのも、物好きな自分の心を惹かぬではなかった。

ここには女の側に視点をおくゆとりと新しい試みを見出すことができるが、戸崎の側に不用意に立戻る箇所も多く、徹底し切れない結果になっている。

だが『煤煙』によって文名を高めた草平にとって、42年秋のころは更に文壇に飛躍できる時期を迎えたように見える。例えば、『国民新聞』文芸欄の高浜虚子から長篇小説執筆の依頼をうけたのも、ひとつの現われであろう。『漱石先生と私』の追想では、「離合」のころといい、『自叙伝』では、前述の「顔」と題する小説を構想した翌日のことになっている。しかしいずれにせよ、これは果たさなかつた。

また「朝日文芸欄」(明42・11・25~44・10・12)が設けられ、漱石の配慮によるとはいえ、草平がその編集に従事することになったのは、彼の文壇的地位確立のためにも文学修業のためにも、大きなプラスになったことは疑いない。「朝日文芸欄」については熊坂敦子氏その他の研究があり、⁵⁾ここでは詳説を省くが、熊坂氏によると、「漱石の書齋を編集局にあて、草平が編集にあたり、小宮豊隆がこれを助けて、総責任は漱石がもつという形ですすめられ」、「草平が『自叙伝』を書き出すと、かわって豊隆が編集することにな」ったという⁶⁾次の草平書簡(明42・11・16小宮豊隆あて)も、こうした創設当初の形態を裏書きしている。

朝日文学はいよいよやる事に成れり、明夜先生中村小生会合仕事の持分をきめる筈、但し妙な事から早稲田先生宅が文学部に成る。明朝行くが、何かプログラムに就て考へて置いてくれ玉へ
42年中の草平執筆には「こゝかしこ」(12・11~12)があり、日本に輸入された自然主義の「行溜りの形」を警告した(熊坂氏)。

*

再び『自叙伝』に戻るならば、42年秋の雷鳥との最後の邂逅あたりまで朝日連載「自叙伝」は中断され、10章以下は「未練」として書かれたものである。この間には大きな断層があり、「未練」の冒頭の

あの朝、あの様にして別れた限り、あの女^{おんな}の消息はふっと絶えた。

という一文にもそれが感じとれる。そして「逢ひたいと思ふ時、自由に逢ふことが出来さへすりゃ、其上の望みはない」と思う様になり、ふと故国へ帰りたい気持が噴き出ることもあった。『煤煙』単行本第1巻が刊行され、やがて43年の春を迎えた。

この年になると、芸妓遊び、踊りや芝居見物、吉原通いなどが頻繁となり、もしくはそれらが心を領するようになる。そのきっかけは、小早川(作中人物名、はじめ「自叙伝」では増田を用いた)なる友人の雛妓相手の飯事のような遊び方を見て居ようかと思ったことであつたが、それというのでも「最う何処へ行っても傍観者の側に立つ外はない」からであつた。この「傍観者」の実感、雷鳥への関心から遠ざかり、他の関心へ移行する間の過渡段階を示すものに他ならない。草平にとって「煤煙」の恋からの離脱のためには、その恋の決意にかわる他の恋への決意が必要だったのである。「女の面白いのは」「自分を自由にする女」か「自分の自由になる女」であり、「一人があんな女(*雷鳥)なら一人は隅江をそれに擬した」、「併し事實は二人とも夫程の女ではない」という失望も、裏からいえば新しい恋の待望であり、それはまた、依然として文学よりも行動の先行を望んでいるのを意味した。43年春の豊隆あて書簡(3・30付)に、

昨宵中座したのは全く芸者買いなるものを止めようか知らんと云う決心がふらふらと湧いたからだ。オ

レは全くアンシャウエンの興味には逆も永く辛抱して居られる人間ぢゃないとつくづく思った。引裂いて骨までしゃぶらなきゃ、逆も永くはつづかぬ。僕をして長く冷い観照の態度を取らしめるのは残酷だ。

併し徹底して見たとて矢張詰らん。例の如く、案の如く詰らなかつた。

最一度ホレたり、ホレられたりして見たい。其外に救はれる道はない。

とある。この文面は、草平の発想と同時に、「煤煙」の恋とは別の新たな行動圏にはいりかけているのを示している。このようにして「煤煙以後」も終りつつあるのである。

新たな恋の行動の対象となったのは、『自叙伝』（「未練」）中の名でいえば、吉原大黒楼の遊女・薄氷であった。そしてその恋の性質は、「煤煙」以前の、つまり「煤煙」の恋によって克服しようとした筈のそれに似ていた。

思へば、私は是迄女よりも女の置かれた境遇に心を寄せて来た。

薄氷に対しても同様であり、「田舎の少女」、また「捨てられたる女」なるが故に、つねとさくにひかれたのと同じ恋情の様式であった。ただ異なるのは、薄氷に対しては、「何一つ心を惹かされぬ女の境遇だけに心を寄せて行」った点であり、「微かなあはれを求めて満足しようとする「淡い心持で女に対したこと」であり、彼自身「あゝ私も変わったな」と感じた点である。

この年（43年）、『漱石先生と私』によると、8月12～13日ころ、牛込失来町に転居した。これは、さくとの安定した家庭生活が始まったことを推測させ（入籍は昭和13年だが戸籍上の妻の座は今日も変わらない）、「煤煙」の恋から遠去かった一傍証ともいえるのである。さくは舞踊家・藤間勘次として名をなした人で、家元の幸四郎も「型では勘次に学ぶところがある」といったという？ 草平が踊に親しみ、やがて作品の上にも反映するのは、彼女によってである。

胃潰瘍治療のため8月6日修善寺に赴いた漱石は同24日大吐血のため危篤に陥り、草平を含む門弟たちも前後してかけつけたが、草平は下痢と痔疾に悩まされ、28日帰京した。痔疾は9月19日に手術を受けている。

この年はまた、「朝日文芸欄」の仕事をつづけ、彼自身も「如何に生きんか」（2・9）、「自然主義者の用意」（3・9）、「ヒューマニティの文学」（9・3）のほか、数回の文芸時評の筆をとった。小説には「四月尽」（『中央公論』明43・5）がある。主人公・久造は洋服店を営み、10年来の妻・お仙と暮している。久造は小僧の身で年期奉公をしていた時、店主の娘と心中をはかり、彼のみが蘇生したという過去がある。それを知ってか知らずか嫁いで来たお仙を「矢張女と云ふものはあんなものかも知れない」と感じながら、無気力な生活をつづけている。そしてお仙の身元調べのために上洛することを考えているが、1月経っても京都に出かけない。「仮寐姿」（明36・7）に似たアンニュイの漂う作品であるが、お仙の寝姿を見ながら「他人と他人が寄って、過去も知らず、未来も知らず、或時期の間、離れられない約束でもある様に、共同生活をする。それが当り前の様にわれも人も怪しまぬ。分らない。」とつぶやく久造は、小さな洋服店主のイメージとそぐわないうらみがある。

*

『自叙伝』の記述は、明治44年にはいつてから、殆んど薄氷との関係に終始している。薄氷はかねてからこの年3月一杯で年期が明けることを告げていたが、草平はその時東京見物の案内をすることを約し、その費用捻出のために心労した。このことは3月30日の宵、小宮豊隆にあてて普通便と速達便とを矢継早に出したハガキによっても裏付けることができる。その中には薄氷が「籠を出て何処かへ行ってしまふ。朝から心も心ならず、一度逢ひたい逢ひたい」、しかし、薄氷「其人に逢ひたきにあらず、籠を出て行くフラフに逢ひたいの也。わが命うすれ行くやうなる日なるかな」とあり、また「来月七日頃（自叙伝掲載の前日まで）ツワンチッ

ヒ位貸して呉れる助ける神はないだらうか。」と書いている。東京見物は約束通り果たし、雷鳥との思い出の地・新井薬師に立ち寄ったりするが、薄氷は郷里に帰り、その後は何の発展もなかった様である。10日程後の4月9日、吉原大火があり、類焼地域を含めると焼失6500戸に及んだ。草平は薄氷の上に思いを馳せて感慨にふけっらしい。——『自叙伝』の話題はほぼここで終わっている。

これより先、2月18日に小宮豊隆にあてた書簡は、興味ある箇所を含んでいる。

世の中には二種の人間がある。つまり生活を勝った負けた、圧した、圧せられたの範疇に入れてのみ生きる人種。とそれ以外に生活をエンジョイする人間だ、如何なるものも只エンジョイする側からのみ見る人種だ、此人種は勝っても負けてもエンジョイする事は忘れぬのだ。前の種類に属するものは曰く次郎、曰く長江、勿論君も這入る、磯村も這入るかも知れん。次の種類に入るものは僕一人だ外には一寸見つからぬ、勿論煤煙のヒロインは前種に属する、見たまへ、要吉は負けた、此点に於ては遺憾なく負けた、弁護も遁辞もない。併し要吉はエンジョイする事は忘れなかった、煤煙を要吉程エンジョイして居るものはない。女に打たれながら倒されながら女の一点一劃をも残らずエンジョイした、あの女を一生連添う男でも僕ほどあの女をエンジョイする事は出来まい。

ここには草平特有の生活態度が現われていると同時に、「要吉が朋子をエンジョイした」という言い方の中に、過去の体験に対する彼の受けとめ方に「深刻がる」ことの少なくなった変貌ぶりが明らかに見てとれるのである。

この年も「朝日文芸欄」には、彼としてはかなり重要なエッセイを書いている。「吾等は新しきものの味方なり」(1・3)、「事実と想像と」(2・7~8)、「人生の素人(「泥人形」の世評について)」(8・27)、「二たび人生の素人」(9・29)などがそれである。また3月には、次郎・豊隆・能成との合著評評集『影と声』を春陽堂から刊行した。草平の部は「糸すぢ」(目次では「縷」と題して「落果」ほか8篇を収めた。

この年の小説にはまず「狂言」(『中央公論』明44・1)がある。肺を病む称吉は「死の怖ろしさ」のために死を決意し遺書を書くが、自裁するにいたらない。1年後再び自殺を決意しピストルを手にして幼馴染の俊子に別れを告げに行く。一度他家で不縁になり今は坂田に嫁いでいる彼女とは嘗って秘密の関係があったのである。しかし「二人の夫をもち三人の男に接しながら痕跡を残さぬ」俊子の様子に憎しみを感ずる。帰宅した称吉は母にも覚悟を告白するが、急を聞いてかけつけた坂田がピストルを取上げると、弾はこめてなかった。坂田が笑い出して「狂言でせう、え。阿母さん、何も心配することは有りませんぞ」というのに対して、「何か言訳がしたい、(中略)併し他人は説伏せても、自分に対しては、何うも言訳が出来ないやうな心持がした」と結ばれている。女性の不可解さという認識、それに挑戦するかのような自虐的な行為の偽装性といったものが取上げられ、草平の思考のタイプを示すと共に、「煤煙」の恋への暗黙の自省にもなっている。

「御殿女中」(『ホトトギス』明44・4)の掲載号は、「五人集」と銘打った臨時増刊で、小宮豊隆「寒き影」ほか、東渡世・阿部次郎・鈴木三重吉の作品と共に収録されている。39才の長田のお慶さんは19才の時から新御殿に上り、親ゆずりの能書で祐筆の役をつとめている。その姪・お絹もお慶さんのすすめで御殿奉公し1年5箇月のち勤めを辞した。その間の御殿内の様子が描かれている。お絹の母(お慶の妹)はお絹が9才のとき蔵の2階で非業の最期を遂げており、父が怠り勝ちで知行を減らされたのが原因という噂があるが、お絹は奉公の前日蔵の二階に上り、自殺の本当の訳が分るような気がする、という場面が印象的である。しかし全体に焦点がボヤけている。なお、お絹は草平の母をモデルにしたもので、関連した記述が『漱石先生と私』に見える。

「母」（初出誌未詳）も44年はじめまでに書かれたことは確実である。高校生・橋原勇作は生母の顔を知らない。彼は自己の運命を格別あわれとも思わないが、母親に会うことの「好奇心」から、利根川畔・布川の粧屋に再婚、5人の子を生み後家となっている母に会いに行く。生活の労苦を額に刻んだ母の姿は予想外のものであり、再会には何らの感動もなく、空しく立去る、という話である。人間の深い結合への期待と欲求とが背後に感じられ、牧歌的な舞台に捨てがたいものがある。なお布川の地は、草平の攻玉社時代の同級生・海老原氏が酒屋を営んでいたところで、恐らくこのころ同氏を訪問したようなことがあって詩材を得たものであろう。後年安香ハナとの出会いをめぐって屢々訪ねることになる因縁の地でもある。

さて44年の最大の収穫はむろん『自叙伝』でなければならない。『自叙伝』は、前述のように、『朝日』連載の「自叙伝」（明44・4・27～7・31）と「未練」（『新小説』明44・10）とを、同年12月春陽堂から単行出版した際、併合して成ったものであり、その内容の大半は、「煤煙以後」の草平の姿を辿るために、既におのずから言及して来た。従ってここでは方法上の特質について付言することとしたい。

『自叙伝』はまず、一人称で書かれていることが注意される。『煤煙』が告白的な作品だとしても、やはり要吉という仮名の人物に、作者は自己を突上げて描いたのであるが、『自叙伝』で「私」を主人公としたことは、そのように浮上した要吉を、やや冷徹に見返す視点を設定して出発したことを意味する。それに伴って、『自叙伝』が『煤煙』の続篇または後日譚というには、ややそぐわない別の非連続の相も露呈している。特に単行『煤煙』の幻想的な「氷獄」の幕切れと、『自叙伝』の冒頭間もなく、巡査に尋問される場面とを突き合わせると極めて奇妙な感を与える。

このように書き出しにおいて既に次元を異にする『自叙伝』であるが、その内部には更に3つの断層を包蔵している。「自叙伝」のうち、41年の部分と42年夏以後の部分との間には質的なちがいがあり、そのつなぎ目はゆるやかな傾斜をなしている。そして43～44年春を扱う「未練」は今少し大きな落差を見せながらこれに接続している。以上のそれぞれの時期における、「煤煙」の恋とのかかわり方については既にのべて来た通りだが、改めて要約するならば、第一部はその恋の延長の中にあり、第二部は漸くそこから遠去かった地点にあり、第三部では、次の行動圏の中にはいつている。そして重要なことは、それぞれの部分をそれぞれの状況に自己を移入して書いている点である。従って対象・題材が異なるだけでなく、それらを捉える眼自体が変貌しており、恰も自転と公転とが重なり合うに等しい特殊な構造をもっている。「煤煙以後」の3年間における草平の変転を一貫した視座でとらえているのでなく、3つの部分に変転そのものを物語っている。もし3つの部分を独立した3作品に区切ったならば、1組の3部作が成立する様な関係がそこにはある。特に第3部（「未練」）の位相のちがいは顕著であって、一旦『自叙伝』の中に包括しながら、後日再びこの部分のみを『未練』一冊に切り離して刊行（大3・12、東京堂）した所以であろう。

だがともかくも、こうした構造をもつ『自叙伝』を一篇のまとまった作品として認定し単行したところに問題がある。『自叙伝』を一箇の作品として自ら捉えた時点（明44・12の刊行時と考えてよい）で、実は草平の胸裡には、過去3年半の転変を貫通する視点はなく、いわば行動の記憶しかなかった。あるいは、それぞれの時期の体験が、体験当時の生々しさをもって息づいていた、とでも考えなければならない。そこで『自叙伝』の最後に、薄氷去ってのちの吉原大火を導入して薄氷にかけた夢さえも滅び去ることを印象づけようと意図しつつ、終章に「大団円」という大時代なタイトルを掲げて、「私」が郷里に帰るというくだりになっても、読者には作品全体の帰結という印象を与えることを困難にしている。まして、『自叙伝』を『煤煙』

の続篇として構想していたとすれば、遠く『煤煙』冒頭の郷里の場面と照応し、首尾の郷里の場面を枠組としてその中に「煤煙」の恋の葛藤が波打っているという構図が、草平の主観の中で存在していたとしても、他の誰にも気づかれずに終わってもやむを得ないのである。

『煤煙』でも、行動の先行が作品の長短両面の根源になったが、『自叙伝』では行動の徹底性が欠けているために、短所のみが露わになった。先にのべた、一貫した視点の欠除がその最たるものに外ならない。つまり行動への意欲が先行するために体験を整序するゆとりもなく必要も感じないところに根本の問題が伏在する。ここで前引の小宮豊隆あての書簡(明43・3・30)が想起される。そこにいう、「アンシャウエン・観照の態度には耐えられない」という意味の訴えは、芸者遊びにだけ通用するのではなく、対人生の態度にもつながるものであり、やがては文学的不毛を惹き起さずにはおかないところに重大さがある。なお阿部次郎に『自叙伝』評があり、⁸⁾ 長江がそれに部分的に応酬するところがあったが、⁹⁾ ここでは省略する。

しかし、「煤煙以後」の時期の短篇小説には、既にふれた通り、人間関係の深い結びつきへの意欲や期待を感じさせるものが多い。もっとも『煤煙』以前の短篇にも見られる傾向であるが、「煤煙以後」の空白の中で、一層明瞭に現われる結果になっている。これは「煤煙」の体験への反省という別の側面と並んで見逃し得ない点であろう。ただ意欲・期待にとどまっているために中途半端な感がなくもないが、草平の内部の重要な露頭であることにはかわりはない。

ところで「自叙伝」連載中から、『朝日』社内で「反道徳的」とする非難があり、漱石の6月10日の日記にも「会議に出る。森田の小説不評判、半ば弁護、半ば同意して帰る」とあって、10月24日に漱石がこの欄の廃止を決意するにいたる¹⁰⁾が、「自叙伝」の連載を7月31日を以て中断したのも、同じ事情にもとづくと考えられる。そして最終回には「都合により」中止すること、続篇を『新小説』誌上に掲載することを予告した。従ってこの続篇を、はじめ小宮豊隆あて書簡(明44・8・30)でも「続自叙伝」と呼んでいるのは当然なのであるが、結局「未練」の題名で『新小説』に登場したことは既に見て来た通りである。こうして、「朝日文芸欄」の廃止と前後して、草平における「煤煙以後」の季節も、ほぼ終りを告げたのである。

- 1) 漱石書簡(明41・11・30、森田草平あて)
- 2) 森田草平『漱石先生と私』
- 3) 草平自筆「年譜」(改造社版『現代日本文学全集』42)
- 4) 生田長江「人として芸術家としての森田草平氏」(『新小説』大2・2)
- 5) 『明治文学全集』75の「解説」(成瀬正勝氏)
- 6) 熊坂敦子「漱石の『朝日文芸欄』細目」(『文学』昭41・2)
- 7) 安藤芳流氏の談話による。
- 8) 阿部次郎「『自叙伝』の世界」、『『自叙伝』評補遺」(『阿部次郎全集』第2巻)
- 9) 4) に同じ。
- 10) 5) による。

なお、小宮(豊隆)家蔵草平書簡の借覧を許された小宮恒子夫人に深甚の謝意を表する。

訂正 * (草平の著作について)——拙稿「初期の森田草平」(本誌4号)末尾に記した、「紅芙蓉」の『女学世界』連載期間は、大8・3～大9・4と訂正。

**小説「母」は初出誌未詳と書いたが、校了間際になって、改造社版文学全集大年表に、『新潮』明治42年11月号とあるのに気づいた。